

Titibu381

秩父平成5年1月 38号

ベトナムは雲の向こうにあった

川島 順

予科21-7

航空7-1

(越谷市)



不安と期待を乗せて

バンコック空港においてチェックインをすませたハノイ訪問の我々一行8名がベトナムエアラインズVN830のゲートの前に集合して今や遅しと待ち構えていたが定刻13:45を過ぎてもなかなかゲートは開かない。デパチャー時間14:25近くになってやっとゲートイン、リムジンに寄せられ空港の一番外れまで運ばれた。

そこには旧ソ連製のTU-134が待機していた。一応双発のジェット機に一同何となくホットする。機内に乗り込んで一向に発進する様子はない。同行の高木惣治⑩が勢いよく椅子に座ると椅子は後ろに倒れたままで元に戻らない。

何もアナンスの無いまま40分遅れでやっと動き出す。長い滑走の末、意外とスムーズに機体が浮かび上がる。機内は異常に暑い。冷房のノズルを操作しても微かにエアが流れるのみ。「上に上がれば自然と涼しくなりますよ」と誰かが冷やかし半分につぶやく。

やがてアオザイ姿の美人スチュワーデスが食事を配りはじめた。タイのガイドが

「VNの食事は美味しくないですよ」と言っていたがパイにミートとサラダを詰め込んだスナックはまあまあ食べられた。スチュワーデスがポットを持って現われたので内容を聞くと「ウオータ」と答える。そのうちコーヒーかお湯を持ってくるだろうとパスして暫らく待つ。一向に持ってくる気配がないので、誰かが催促すると、「ホットウオータはない」とのそっけない返事に誰も文句をいう元気もない。トレイに乗せられているティバックはどうやって飲むのだろうか？

先月中国旅行をした時、コップがなくて随分不自由したことを思い出して配られたプラスチック製のコップを頂戴してバックに入れる。

一抹の不安と期待を乗せて機体は一路タイの大平原の上空を東進する。やがて、雲の合間から山脈が見えてきた。恐らくラオスの上空であろう。幾重にも山脈が連なり、どこまでも続く。ベトナム戦争の時、この山脈を縫って、蟻の大群のように物資を運んだであろうベトコンの姿が瞭に浮かぶ。

機体はやや北に進路を変える。山脈の間に平野が見えてきて間もなく大きな川が眼にはいる。もうベトナム領に入ったのであろうか。やがて機首を下げて着陸体勢に入る。

飛行場に牛がいた

初めてのベトナム、窓外の景色を食い入るように眺める。なんと飛行場のどまん中に牛がいるではないか。滑走路と滑走路の間の草叢に数十頭の牛が放牧され、それを牧童が追っている。何の柵もない飛行場の

芝生で悠然と草を食む牛の姿にまずド肝を抜かれる。

続いて入国審査、手荷物検査、緊張して係官に旅行社より貰った書類に入念に書き込んだ申告書を差し出すと、簡単に取り上げ別の紙に書けという。あわてて書き直して提出すると別の係官が特に荷物の検査をするでもなくとも簡単に OK。

やっと関門を通りぬけた我々一行はベトナム旅行社差し向きの小型バスに乗ってホテルに向う。辺りはすでに夕闇が漂い、田園風景の間に真直ぐ延びる高速道路を南下する。時々見える民家には電灯の明かりがちらほら見える。水田の中に意外と低く縦横に高圧線が張りめぐられている。もっと暗いと想像していたが思ったより電気事情は良いようだ。

大きな河に懸けられた新しい橋を渡って一般道路にでるとまもなくホテルに着く。ホテルはハノイの郊外の大きな湖の畔にあり、我々の部屋は湖上に突き出たしゃれたバンガロー風の建物にある。

結局 1 時間程遅れての到着に、私を迎えてくれる筈の Thuy さんはいない。フロントに聞くと 1 時間程前に電話があったとのこと。慌てて事務所に電話を入れても誰もでない。1 時間程何の連絡もないまま部屋で待機する。8 時近くなり諦めて食事のためフロントの前を通ると丁度来合わせた Thuy さんとバッタリ。ホットして早速翌日のスケジュールの打ち合せをすませて遅い夕食を採る。かくしてベトナムでの第一夜は暮れていった。

翌日はベトナム特許庁を始め商工会議所、裁判所、著作権事務所等々、ハードスケジュール。その合間を縫って、ピアノレスト

ランでの食事、ホテルの渡り廊下からの釣り、ウォーターポペットショー（水中操り人形）の観劇等、結構面白い話があったが、紙面の都合で割愛する。

自転車とバイクの行列。意外とバイクが多い。中国に比べてまだ自動車は少ないが、人も自転車も全く自動車に関係なく自由に道を横断する。街にはビール、コーラ、ジュースや食料品を並べた小さな店が目につく。日用品はかなり豊富、デパートに行けばなんでも手に入る。街の佇まいは中国そっくり。ただし、5～10 年位遅れている模様。（1992,11.4）



ハノイ市内の朝のラッシュアワー